

# 「魔除け」

—初稿—

2023/1/13

米俵

〈人物表〉

小林 光輝	(12)	小学6年生
小林 久美	(35)	光輝の母親・主婦
小林 孝雄	(48)	光輝の父親・会社員

〈ログライン〉

光輝は、父親の母親への暴力を目の前で見たことで、ずっと計画していたことを実行する話。

〈作者の狙い〉

子育てをしている親世代へ子どもへの愛情とは何かを考えて欲しい。また、家の中には見えない箱であり、その中で行われる暴力は過激化しやすいという恐怖も伝えたい。

1 小林家・リビング（夜）

一軒家のリビング。白で統一された高級家具が置いてあり、棚の上に白いだるまが置かれている。

小林光輝（12）、ダイニングテーブルで算数を勉強している。

テーブルの上には、中学受験用の教材が重ねて置いてある。

小林久美（35）、光輝の隣に座り勉強をみている。

久美、問題を指さしながら、

久美「光輝、そこ。また間違えてるよ。この前も言ったでしょ」

光輝「……母さん、トイレに行きたい」

久美、時間を確認し、大きな溜息をつく。

久美「またなの。さっきいったじゃない」

光輝「でも……」

久美「分かった。行ってきなさい」

光輝、トイレに行く。

久美、その後ろ姿を見る。

2 小林家・玄関（夜）

久美、玄関に正座し、待っている。

小林孝雄（41）、玄関のドアを開けて黙ったまま入ってくる。

久美「おかえりなさい」

久美、孝雄のカバンを受け取り、靴をそろえる。

孝雄、スーツを脱ぎ、久美に渡しながら、

孝雄「光輝は何してる」

久美「算数の問題が終わらなくて、まだ解いています」

孝雄「またか……」

孝雄、久美の髪を掴み上げて、

孝雄「お前はちゃんと教えてんのか？」

久美、痛みで顔をゆがめ、髪を押さえる。

孝雄「明日は、俺が見るからいい」

孝雄、久美を壁に叩きつけ、風呂場へ入っていく。

3

小林家・リビング（夜）

光輝、ダイニングテーブルで勉強を続けている。  
解き終わった問題集を向かい側に置く。

孝雄、光輝の横で夕ご飯を食べている。

久美、光輝の前に座り、問題集の丸付けを始める。

孝雄「おい、いつになったら終わるんだ」

光輝、手を止め、問題集を見たまま、

光輝「あと……」

孝雄、遮るように、

孝雄「光輝、俺が出した課題は多すぎるか？」

光輝「……そんなことはありません。合格したいなら、これ

ぐらいは普通だと思います」

久美が丸付けをしている問題集の×が続く。

孝雄、それを確認して、

孝雄「そうだよな。お前が無能で遅いだけだよな」

光輝「すみません、お父さん。すぐに終わらせませう」

光輝、問題を再び解き始める。

孝雄、久美を見て、

孝雄「まったく、誰に似たんだらうな」

久美、小さな声で、

久美「すみません」

孝雄、音を出してみそ汁をすする。

4

小林家・光輝の部屋（夜）

鞆、ヘッドホン、ベッドだけが置いてある部屋。机はない。壁には、合格と書かれたポスター。

光輝、ベッドで横になっている。

1階から物が倒れる音、怒鳴り声などが聞こえてくる。

光輝、ヘッドホンをしてから、鞆からシャープペンを数本取り出す。

ダーツを投げるように合格のポスターに向かって繰り返し投げる。

シャープペンは、ほぼ同じ場所に当たって落ちる。

光輝、ダイニングテーブルで勉強をしている。

孝雄、隣に座り、光輝の勉強をみている。

久美、昼食を作っている。

孝雄、突然光輝の手を叩き、強い口調で、

孝雄「おい、さっきと同じミスしてるぞ」

光輝「ごめんなさい」

光輝、急いで消す。強く消しすぎて紙が破れる。

光輝、貧乏ゆすりを始める。

孝雄「それやめろって」

孝雄、光輝の足を叩く。

光輝、シャープペンを強く握る。

光輝「お父さん、トイレに行ってきててもいいですか？」

孝雄「は？ 何回目だ？」

光輝、答えず下を向く。

孝雄「お前、朝からトイレ時間だけで30分は使ってるぞ。

そんなに溜まってんのか？」

孝雄、光輝のお腹をぐりぐりと押す。

光輝、下を向いたまま耐える。

孝雄「あつ、そうだ。お前、もうオムツつけろ」

光輝、驚いて孝雄の顔を見る。

孝雄、台所にいる久美に声をかける。

孝雄「おい、急いでオムツ買って来い」

久美「えつ、オムツ……」

孝雄、久美を睨む。

孝雄、光輝の背中を叩いて、

孝雄「オムツぐらい、大したことないよな、光輝」

光輝、下を向いたまま答えない。

孝雄、久美を睨む。

久美、急いで用意し、出ていく。

6 スーパー・店内（昼）

久美、オムツ売り場の前でオムツを見つめたまま止まっている。

オムツに手をかけ籠に入れようとするが、やめて戻す。

急いで店を出る。

7 小林家・リビング（昼）

久美、息をきらしてリビングに入ってくる。

光輝、ダイニングの椅子に縄で足をくくりつけられ、勉強をしている。

久美、急いで光輝に近付き、縄をほどこうとする。

孝雄、久美の体を蹴り飛ばして、

孝雄「お前、何してんだ」

久美、無視して、縄をほどこうとする。

光輝、シャープペンを強く握りしめ、問題集を見つめたまま動かない。

孝雄、久美の髪をつかみ、

孝雄「だから、てめーは何してんだよ」

久美、孝雄を睨みつけてから、

久美「私の息子を助けてます。こんなのは、おかしい」

孝雄、久美を床に叩きつけて、

孝雄「誰に向かって言ってるんだ」

久美「家の中の悪魔にですよ。暴力で支配することしか知らず、息子の愛し方も考えようとしないう無能男」

孝雄、久美の腹を蹴る。

久美、お腹を押さえ唸る。

孝雄、久美の髪を掴み、引きずりながら、

孝雄「オムツも買ってねーし、お前から教育が必要だな」

久美、引きずられながら、声をふりしぼる。

久美「光輝、母さんが間違ってた」

光輝、久美の方を見る。

久美「あなたは、そのままで最高の息子。受験も勉強も関係ない。だから……」

孝雄、遮るように久美の頭を思いつきり膝蹴りする。

久美、勢いよく床に倒れ、動かない。

光輝「母さん」

光輝、急いで、足の繩をはずそうとする。

孝雄「おい、はずすんじゃねえぞ」

光輝、動きを止める。

孝雄「お前は、そのまま勉強しろ」

孝雄、リビングの扉を開け、意識のない久美を廊下へ引きずっていく。

8

小林家・廊下（昼）

孝雄、久美を引きずって階段下まで来る。

光輝「お父さん」

孝雄が振り向いた瞬間、右目にシャープペンシルが飛んできて刺さる。

孝雄、大声を上げて、床をのたうち回る。

右目に刺さったものを抜く。

先端を加工されたシャープペンが転がる。

光輝、痛がる孝雄に近付き、

光輝「片目ぐらい、大したことないよね。お父さん」

孝雄「ふざけんじゃねーぞ」

孝雄、光輝の足を掴む。

光輝、勢いよく孝雄の左目に加工シャープペンを何度も突き刺す。

孝雄、大声を上げる。

光輝「ほら、赤いダルマの出来上がり。魔除けだよ」

光輝、笑う。

(終わり)